

この世とあの世の イメージ

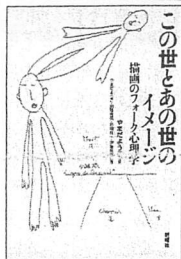
描画のフォーク心理学

編○やまだようこ

著○やまだようこ・加藤義信・戸田有・伊藤哲司

新曜社 5040円

世界の人が描いた 生と死の絵を読み解く



ふつう人は、人の遺体を傷つけることには非常に強い抵抗感がある。また、とっくの昔に死んだ肉親にむかって話しかけることもある。ほとんどの人がそうだろう。科学的には、死んだ人は何も見えないし聞こえない、身体をどうされようが気づくわけもないのに。

われわれは人の死を単なる消滅ではないと考える。そういうふう考えることによって、ライフサイクルを前向きにとらえることができているのだ。人は親から子へ、世代から世代へ何かを伝えることによって、人としての居場所をもつものだ。それを互いに励ましあうために、「あの世」や「生まれかわり」の物語が役立つのである。

こうした観点から、「たましい」や「この世とあの世」のイメージを数多くの人に描いてもらい、その共通点をさぐる。絵を描いたのは、日本、イギリス、

フランス、ベトナムの大学生で、合計2040人。

たましいが死体から脱け出る、この世の上方にあるあの世、死んだ人がこの世のわれわれを見守っている、などなど、調査から浮かび上がったのはおどろくほどの世界共通性。たましいというかたちのない(想像上の)ものを描くときでさえ、われわれはある「文法」や「物語」の枠組みにしたがっている。

人間の死生観を伝統的心理学のように個人のものであるのでもなく、文化人類学のように民族的なものとするのでもなく、もっとより大きな物語としてとらえるこの研究は、非常に意欲的で意義のあるものと思う。高齢者医療やターミナルケアに従事する人にとっては益するところ大なのは言うまでもないし、わたしとしては2040人の不思議な絵を眺めているだけでいつまでも飽きない。(渡邊)